

## 学校舞踊の創作に関する諸問題

碓 井 エ イ

Ei USUI : Problems in the Creation of the School Dance

### は じ め に

毎年、前期に開講している舞踊Ⅰは多人数となる。受講生は毎年同じように軽快な各国民踊を楽しみ、動物乗物の模倣遊びに微苦笑する。また想像豊かなりレー童話を創っては動きの漫画に歓声を出す。最後の創作活動では具象と抽象の境界を彷徨いながらも、個性美豊かな作品を一応創作できる。

踊ることの好きな人達は多い。然し創って踊る活動を悦ぶ人は少ない。軽い跳躍の緊張感を喜ぶ人もおれば、性格上の問題から人前での踊りは出来るだけ避けたいと願う人も少くない。

創作に関しては毎年同傾向の悩みを知らされ、同じ傾向の問題点が指摘されだしている。このことは昨年、特別課程保健体育専攻生男子に対する舞踊指導実施により、明確に問題とする目標を把握できるようになった。指導者の立場で優秀な創作作品を創り踊れても、その作品を生んだ種々の創作過程は差意識の深化していない児童・生徒には勿論理解できない。問題は成長発達段階に応じた、模倣・表現・創作の根本問題の追求により、その系統性を探ることにある。

今回は問題とみられる周辺から基礎資料を求め関連のある事実を知り、更に簡単な分析を試み、創作過程の理解を容易にする学習指導型態を生む手がかりにするものである。

### I 問 題 の 概 観

戦後、学校体育指導要綱が公布され、従来のように統制的性格をもたない基準方向が示されてから二十有余年になる。この間その内容など相当著しい変遷をみせているが、とりもなおさず表現、創作教育の困難な実態をもの語っているとみられる。

昭和22年、学校におけるグループ活動を基盤とするダンスは、生活経験や生活感情から取材して創作的表現に導く、と自己を表現する創作的態度が明らかにされた。次いで昭和24年小学校ではダンスの名称を児童の側からリズム運動と改められ、リズムによって楽しい活動を誘発されるものとして教材中心的性格を払拭した名称に改められた。この基本線は昭和26年中学校・

高校にも延長され表現力・創作力・鑑賞力を練り情操を豊かにしようとのねらいが明示され、フォークダンスは男女共学より男子にも望ましい選択教材にあげられるようになった。さらに昭和29年、小学校学習指導要領が改訂され、リズム運動は「経験の表現（模倣）」とフォークダンス（歌を伴う郷土的遊びを含む）の二つの質に大別されグループ表現活動の価値が明らかになった。そしてよい表現の手がかりとなる基礎的技能の指導が重視され「基礎リズム」の名称も生まれた。ところが現場の未消化状態が続き、遂には表現・創作活動のなかに含められ、戦前の基本練習と混同しやすかった名称も消えるようになった。同様に試案であった「模倣物語り遊び」も表現系に内包され、漸く現在になって「ダンス」の名词で高校に至るまで貫通した目標と内容を示唆した名称決定をみるまでに至ったのである。創る活動の困難を打開し、その過程を容易にする手順を示した生みの苦しみが理解できるというものである。

最近まで舞踊の作品創作はどのような形式によるべきか、また限られた学習時数のなかで舞踊の身体を育成する為には、どのような基礎練習・応用練習があるか等について幾多の理論や実際が急速に生れたり伸び悩んだりしている。創作の歴史の浅い過去においては、舞踊専門家達が舞台上で最大の演出効果を出す為、純粋に磨きあげられた超技術的な技術を確立し抽象芸術の範疇に含められると観られる程、優れた芸術創作を生む理論・方法を借りて学校教育における舞踊を考える傾向があった。その結果舞踊作品は観賞に値するだけの構成内容を持たねばならないとして指導者の作品を指導者の演出で発表される作品が多くなった。戦前に指導実施された既成作品の型態と何等変らない教育的内容の稀薄な子供達を置いてけぼりにした方向を歩み続けていると疑わざるを得なかった。

身体的表現は素朴であるが、男女差を問わず多少の年齢差は問わず、また多少の経験の有無を問わず誰でもが持っている素質的要因である。それは単なるジェスチャーの範囲に含められる単純な動きではない。勿論動きを誘発する適切な情景の設定・助言・リズムカルな伴奏類を必要とするが、未経験の対象をも落花の律動を表現させる、太陽の輝き・太鼓の響き等、生活経験があり具体的に特徴を掴める事物は自由に表現できるのである。そしてこれ等の表現は各人特有の個性が惨み出て二つと同じ動きのリズムが観られない豊かさが感じられ、観る者を創作的活動のもつ楽しい境地に誘い込むと言っても言い過ぎにはならない。舞踊指導者達は此の一般的対象から引き出せる一般的表現能力の内在に着眼し、ここから創作に有効な段階的指導法のあり方を究明しなければならないと考えている。

昭和41年5月安来幼稚園で武上教諭の速度感を重視した研究授業があった。一人っ子の或問題児は終始遊戯室の壁を向いて立った姿勢を崩さなかった。蝶、小鳥、兎等の模倣遊びに興味を示さなかった子が「皆でお花を作りますよ」の指示で、くると回れ右をして両手で花になり2、3人の友人としゃがむ状態になった。十種類の模倣表現中興味を持ったのは「花になる」遊びだけである。このことは模倣表現の特殊性である自由にできる自己表現の楽しさと友達と一緒にできる喜びが漸くこの子を動かし得たと観察できたのである。

昭和44年度より特別教育課程保健体育科男子専攻生に舞踊Ⅰを必須課目と課している。最近の若い人達に愛好されているジャズブームにのって、ジルバ・マンボ等の急テンポのリズムは彼等の生活環境のリズムに何らかの影響を与えているとみられる点もでている。勿論踊って楽しむ感情は万民共通であるが生活経験の総べてを基盤とした自己表現活動の萌芽が認められるようである。小・中・高校において全く舞踊経験のない彼等にも、舞踊創作の前段階である模倣表現の小集団活動は比較的容易にとり組む様相がみられる。本年度もリレー童話を基底として桃太郎の題材で動く漫画を構成し、役割決定後それぞれの場面を設定し動きを連続させた表現活動は相当豊かな内容を含み楽しく鑑賞できた。然しひとつひとつの情景を動きに移す写実的模倣表現の作品を消化できる彼等も、4呼間の動きを創り、これを基調として16呼間のフレーズに動きを延長する抽象的構成になると途端に活動に俊巡がみられ、例えば体操部所属学生は床運動の諸要因を組立てるなどが所見させるようになる。人間生活のリズムは生理的機能のリズムに支えられて1, 2, 1, 2強弱強弱と反復され、また人間生活は起床から就寝まで、一つ一つの場面構成の中で営まれる現実から、生活経験に関連する模倣表現学習は経験の有無を問わず誰にでも容易にできると推察できる。然し写実より抽象への移行の問題は中学生の発達段階の特性にみられる動きの思考過程の難かしさにあり矢張り固有の写実的題材より同じ題材による抽象的理論を導き出して指導を進めるのが妥当なのではなかろうか。

男子専攻生に舞踊を指導して重要な問題のひとつは、舞踊の特殊性の要因である身体性に関連する事柄であって、舞踊の表現活動形式が「身体の動き」によってとらえられる点である。男性の性得的な特性は強靱性にあり、女性のそれは柔軟度の高い流動性にある。人間の生長発達過程をながめる場合、女子が男子の優位に立つ運動機能面は柔軟性だけである。この性差による限定を越えて、女子は男子と同様に体育領域中の陸上運動、ボール運動、体操及び器械運動、その他の運動（水泳など）を実施し、更に舞踊創作の歓喜と苦悩を体験している。これに比べ男子については全国的にみても表現活動の経験は特殊な少数例を除き皆無に近いのが現在までの実情である。最近総べての若い人達が経験しているフォークダンスは舞踊内容の一領域を占めている。然しフォークダンスは各国民族のもつ風俗伝統が創りあげた既成作品であって、舞踊創作とは全くその手順構成を異にする。

だから創作経験の無い彼等に創作に当って起る問題点、過程に起る諸種の困難点を理論的・实际的に理解を求めるのは相当の至難事であると言わざるを得ない。問題点の幾つかをあげてみる………自分の表現能力に適し容易に踊れるであろう見透しの上に立った題材選択・動きのよい連続を期待できる内容のとらえ方・題に適切な新鮮な動きの生みだし、そして思考を次々動きに駆り立てて一つのものから漸次別のものへ推し進めていく創作過程に起る主観と客観の矛盾の実体・自己との戦いであり孤独との戦いでもある。また学校教育活動として多面的な価値をもつ小集団表現ともなると、他人との相互理解による合議活動が必要となり個人のこれまでの舞踊経験・対象のとらえ方・考え方・技能の個人差は全体の中の一部として新しい環

境への適応を試みる必要に迫られるようになる。創作舞踊を理解する為には有能なリーダーと共に作品を創作する体験が必須となるが、その前段階の理解の為にリズムカルな基本運動の練習継続と、模倣の段階が表現へどのように移行するかは、簡単な作品習作段階の体験に依らなくてはならない。更に重要な問題は写実的舞踊から抽象舞踊への移行の在り方で、創作舞踊を努めて楽しい学習活動にするねらいを達成する為の一つの課題とってよかろう。とにかく教材として最も著しい男女差がある舞踊を男子に理解させる方法論を持つことが最大の課題といえよう。

## II 二つの研究会の動向

昭和40年、島根大学、松江市立朝日小学校で開催された幼稚園、小・中・高校のリズム運動研究者を対象とした学校ダンス研究会の討議内容をあげてみる。幼稚園においては模倣表現を容易にする題材選択・補助教材・動きを生み出す手がかりとなる指導助言など、小学校においてはリズム運動で終始する45分授業・題材の観方、指導者の示範の是非、音楽リズムとして低学年題材のとらえ方など、中学年では経験の少ない男子教諭が適切な題材選択の困難な実態が中心議題となり、また場の使い方が問題となった。中学校では題材決定は教師と学習者の話し合いに依った結果その展開に見透しが持てず指導過程につまずきをみた、また小集団相互の結び付きを欠く状態が直接表現活動に与えるマイナス面が教師の反省として提案された。更に表現につながる基礎運動、写実的題材にあきたらず抽象的題材にはついていけない困難な時期を対象とする問題点等があげられた。

同年11月神戸市で開催された女子体育連盟第一回研究集会において問題となった討議内容の一部をあげてみる。小学校低学年——教師の助言、模倣の動機づけ（適格を期するため題材の特性を明確に把握する。教師の動きを与えて効果のあがる反面児童の動きを規制する面もでる。）表現学習の到達規準の問題、学習者が経験の浅い題材に関する心得、児童の興味の持続、伴奏音楽などが問題視された。次に高学年の部では作品のやまと作品の中核、いわゆる中心の語解釈について定義づけを論じ、中心中核になる動きはバラバラである筈はない「これしかない」という一つの動きを中心にして作品を発展させる方法について、また子どもの意欲と動きが一致せず息づまった場合の方法（助言のしかた・リズムの変化・見せる・話し合う）を使い分けて指導する。その他表現の意欲のさせ方、音楽的拍子感を重視した表現指導は児童の活動に片寄りを生ずる傾向があるがこれを打開する方法（児童のなかに白熱の現象を生じさせる、リズムの動きに変化を持たず、教師のリズムを時には与える、音色を変えてリズムを刺激する）低学年時の模倣学習の積重ねの減少をみる場合は感じ、ものらしさを表現する活動は困難である。またアンバランスの形をドリル的に練習する際は足だけの動きが少なくなったり、上体を動かさず状態が総べて動いていると思ひ込む錯覚が減少する等が答議内容となった。流石は日本中から集合した千数百名の教師達だけに、教育する対象を一応把握したとみられたが、

学習指導過程の展開法が主に教師の側より論じられたと受け留められた。

この二つの協議会を比較した場合は、前者は創作指導の初期の問題が論じられている。例えば題材決定が常に問題になっているが後者の場合は、題材に対する経験が浅い事態の対応の仕方や題材の特性を明確に把握して助言及び模倣の動機とする等が論じられている。また指導者の示範に関して後者は効果的方法を強調したり両者の協議内容に相当のずれが認められておもしろい。殊に後者においては表現問題の焦点である表現を容易にする方法が考えられている。

①一般的にはいらただしさを感じる規則的なリズムを突き破って表現の意欲とする。②身体的精神的ウォーミングアップがあり衝動的な状態に落ち込んでおき、そこへ内容を嵌め込み自然表現を期待する。③表現者のなかに白熱したものが生まれれば表現が容易になる。これ等は表現学習指導の根本的技術として誰でも吟味熟慮すべき事柄である。

### Ⅲ 舞踊創作に関する調査方法と内容

〔1〕昭和39年11月 県立出雲商業高校1年を標本として6週間で自由題による作品完成・鑑賞を実施し、毎週授業後創作過程における問題意識に関する調査を行なう。学習指導計画・授業実施——本田俊紀恵教諭、活動観察・8ミリ収録は筆者が実施する。

〔2〕昭和40年10月 出雲部13校、岩見部13校女子教諭76名の協力を得てリズム運動学習指導に関する調査を実施する。

〔3〕昭和41年 教育学部体育ダンス受講生78名を標本にして、舞踊に関する各種経験・意識調査・自由課題による個人作品より創作上の問題点を考察する。

〔4〕昭和43年 舞踊Ⅰ受講生1年84名、2年38名、3年18名を標本にして、題材の選択態度、作品創作にみられる空間活用の傾向、踊跡分析を実施考察する。

〔5〕昭和44年 41年と同質の調査を舞踊Ⅰの受講生83名を標本にして実施する。更に与える条件によって起る即興的動きの生み出しの変化に関する調査を実施する。

〔6〕昭和45年 昨年の問題を大体同様に動きの生み出しに関して、与えられる条件によって起る動きの質的差異点及び性差にみられる動きの傾向、動きの発展の傾向・難易度の分析・写真より抽象への推移分析に関する調査等を実施している。

〔3〕〔4〕〔5〕に関する概要は山陰学会に於いて発表しているが、今回は〔1〕～〔5〕に関する総合考察を試みようとするものである。

#### (1) 表現(身体的)学習指導者が直面する問題点

創作舞踊指導者が重要視する問題点は、過去の教材を教授する指導形態から、発達の特徴を知り変化の周期の理解の上になつた学習指導法の確立に関連する事柄である。当初は指導者の創造性に任かすままでつき離された現場の指導者達であったので、現時点においても諸種の指導上のつまづきをみるのも止むを得ない実情と言える。

④ 指導技術に関連する項目(数字は抽出員数)

指導技術の不足(13), 創作指導に不馴れ(6), 小集団の構成(2), 教師の模倣になり易い(1), 指導に伴奏を並行する技術が困難(1)

㉑ 施設・用具・全体的指導計画に関連する項目。

施設・設備が不十分(場所が狭い)(9), レコードが無い(8), 指導時数の不足(9), 低学年時指導時数不足の為高学年指導が不満足(2), 研究会へ積極的に参加できない。適当な伴奏楽器類の不足(2), 指導の準備に時間がかかり過ぎる(2), 教材研究時間の不足(1)

㉒ 児童に関連する項目

高学年男児が羞恥心を抱くため満足に指導できない(18), 興味に乏しく学習意欲が低い(4), 表現は概念的・固定的(3), 児童が創作を恥ずかしがる(6), 児童の動きが小さい(7)

㉓ 希望項目・その他の項目

男子教諭にも指導力を(2), よい動きの体型フィルムが欲しい(1), 表現に対する教師の評価のしかたの差異(2)

受持学年については低学年41%, 中学年40%, 高学年19%無し1%, 低・中・高学年共に複式学級を担任する教師は1名宛となっている。また他学級のリズム運動出張指導に要する時数は1時限(1名) 2時(3) 5時(2) 6時(1) 10時(1) 17時(1)であり, 男子教諭は7校においてリズム運動指導に参加し, 21校は皆無である。ただしフォークダンスは1名(3校), 2名(4校), 3名(2校), 4名(1校)となっている。

以上の諸問題のなかには現在においても, また全国的に眺めた場合も常に研究会の俎上に載せられるのも少くないが, 諸種の講習会参加または一年一年指導の経験が増加するに従って解消している問題も決して少くはないと考えられる。子供達の発達の特長——変化の結続過程の理解によって, 対象に何を与え何を引き出せるかが容易になり, 更に豊かさが加わって生み出し創り出す喜びを知ることになる。

## (2) 基礎資料

体育ダンスは昭和42年度より舞踊Iとして実施しているが受講生は一応真面目に活動し, 個人作品・グループ活動による作品も次第に潤沢といえる内容をもっている。然し創作過程には多くの技術的精神的対人関係上の問題点が錯綜していると推察されるので次の諸調査結果の傾向をあげて問題点の考察に備える。

最近の若い人達は戦前と比較し豊かな個性をもっていると理解でき, 彼等の表現活動の豊かなあり方にも個性を自覚し自己を確立する方向が伺える。これを小・中・高校におけるクラブ活動所属の実態よりみる。小学校期は50%, 中・高校期は共に63%が積極的に参加する傾向が示されている。(この項の数字は員数を示めず)。小学校期——合奏, 社会科, 陸上と排球, 放送と排球, 新聞, 習字と図画, 図書, 合唱と排球, 合唱と排球とドッジボールが一名宛。美術, 家庭, 珠算, 陸上とドッジボール以上2名宛。陸上(4), 排球(5), 合唱(8)。中学校期——親

善, 理科, 絵画, ESS, PEC, 図書, 英会話, 詩歌, 花道, 排球と放送, 美術と音楽, ヴァイオリン, ソフトボール, 文芸と茶, 放送, 珠算, ブラスバンド, 習字と卓球, 書道と合唱, 陸上, JRC, 器械, 以上1名宛。卓球, 理科と珠算が2名宛。排球(9), 合唱(9), 箏球と陸上(8)。高校期——ユネスコ, 図書, 調理, 英会話, 自然科学, 考古学, 邦楽, 生物, 演劇, 書道, 箏球, 陸上, 生花, 英語以上1名宛。化学, ESS, 社会, 合唱, 新聞以上2名宛。JRC, 美術, お花と茶, 文芸, 排球が3名宛となり発達段階に即応したクラブ活動所属の取り組み方に積極性と共に個性化の方向が伺える。そして活動参加の意識調査結果は友人との協調性を確かめ(36%)精神的なプラス面を認め(16%)少数ではあるが好きなことを思い切りやれ

(第一表) 小・中・高校における舞踊創作に関する経験 (%)

分 類		学 年			1			2			3			
		1	2	3	4	5	6	1	2	3	1	2	3	
表 現 ・ 創 作 系	作 品	A	9 11	10 10	9 9	12 11	18 13	19 13	21 6	22 7	18 6	22 5	21 5	18 5
		B	1	1 2	1 2	1	4 2	4 3	6 1	10 3	8 4	5 3	5 1	1
		C					1 2	1 1	4 2	1 5	3 3	4 1	5 2	8 2
		D			1		3			1	1		2	
		E	4	3			4	8	22 12	29 13	40 20	35 23	48 46	50 54
	伴 奏	A	9	8	9	8	13		9		12	13	18	18
		B					1	1		3	3	6	25	24
		C					2	6	9	10	15	14	13	15
	手具					1	2	2	3	4	1	2	2	
	手具系注		4	2	3	4	3	4	6	12	10	6	12	4
運 動 会	作 品	A	32 25	35 24	36 25	41 27	47 30	45 30	42 30	40 30	44 33	36 27	37 27	41 29
		B	9 5	9 4	9 5	9 5	9 5	8 5	10 10	13 10	8 2	10 14	12 13	6 11
		C					1 1		1	2	1	1	3 1	1
		D						1	1	3	4	1	1 4	1 1
		E				1	3	3	3	1 3	6 3	6 3	3 6	4 7
	伴 奏	A	25	25	29	31	35	36	39	41	41	39	45	38
		B						1				1	2	2
		C									2	2	2	2
	手具		2	3		2	2	6	13	17	21	13	25	19

上段—S41年 体育ダンス受講生78名に対する調査(上下の区別なしも含む)

下段—S44年 舞踊I受講生93名に対する調査

作品 A レコードによる既成作品 B 教師の創った作品  
 C Aをグループ活動で一部分創って作品とする D Bをグループ活動で一部分を創って作品とする  
 E グループ活動によるグループ作品  
 伴奏 A レコードによる伴奏 B 各グループで伴奏を創って作品に合わせる  
 ※ 手具 S41年, 手具運動に関する調査

る環境に満足している。

③ 模倣・表現・創作活動諸経験の実態

数年前舞踊Ⅰ受講生の服装を、懸案だったしショートパンツに規定した頃から、創作指導が多少容易になったと観察している。一年毎に若い人達の身体的表現が活発化する傾向が直接感じられたが、一方各研究会等ではダンスの嫌いな児童・生徒が予想外に多い実態を知らされていた。殊に小学校においては表現学習指導者が直面している問題点が其の俣学生達の創作経験の実状に反映していると考えられる。

④ 民族芸能に関する鑑賞その他について

(第二表)

(イ) 郷土芸能の公演鑑賞

—この項はS41年度調査を主とする—  
(%)

	な し	1～6回	7回以上	N.A
S41年	33	45	6	3
S42年	37		63	

(ロ) 郷土芸能のテレビ番組鑑賞

観 る	ときどき	観 ない	N.A
19	51	15	5

(ハ) 郷土芸能保存意義に関する意識

	認 め る	判らない	なくてよい	余り認めない	多分あってよい	N.A
S41年	97	1	0	0	0	1
S44年	93	3	1	1	1	1

(ニ) 郷土盆踊り参加について

	な し	1～7回	8回以上	毎 年
S41年	46	33	3	1
S44年	47		53	

(ヒ)

楽 しい	楽しくない	見て楽しい	物見気分
87	7	3	3

(ホ) 舞踊公演などの鑑賞

よく観る	日 舞	洋 舞	見 ない
1	27	33	33

(ヘ) 古典バレエのテレビ鑑賞

見 る	ときどき	見 ない
17	44	37

(ト) テレビ放映鑑賞後の自由記述による感想

肯 定 的	批 判 的	否 定 的
34	43	23

(チ) 歌と踊りのテレビショー鑑賞

楽 しい	幾らか楽しい	楽しくない
75	25	0

(リ) 舞踊経験への興味関心

	好 き	嫌 い	どちらとも 言えない	N.A
S41年	29	14	53	4
S44年	34	25	41	0

(ㄨ) 体育ダンス講義内容の希望に関する項

創 作	フォーク ダンス	遊びをと り入れる	楽しい内容	能力差の現 れない授業	レコード で踊る	N・A
13	26	13	1	2	6	35

NHK得意番組「ふるさとの歌祭り」に刺激されている実際も一つの誘因となり民族芸能保存熱が台頭している状態は矢張り喜ばしい現象である。次に積極的に保存意義を認める学生の所見をあげてみる。地方の風俗・習慣が理解でき地方の個性が伺え、その歴史を辿ると面白い。郷土愛を何時までも保てる。昔の生活が惨み出て人の心の故郷。古典的美がある。その時代に生きた人々の感情を保存できる。良い意味の伝統を作り人々の楽しみとなる。古人の素朴さに発した姿を残す。生活の踊りは残したい。重要なリズムと動きの保存の意味で郷土の人々の知恵を尊重する。高い芸術と伝統に触れられて民族の歴史を感じる。何か深い床しいものが足りない現在では重要な存在である。地方の特色を現わし郷愁の思いを抱かせる。都会へ出た時心が休まる。

豊かな芸能に恵まれている当県だけに強く保存を支持する心構えが確立して頼母しい。然し少数意見ではあるが真剣に保存実態に批判を加え正しい保存を期待する熱意も知らされた。

㊦については、盆踊りは次第に廃れる傾向にあるが祭りには踊りたい。年に何回か皆で楽しめる集りが欲しい等と生活を楽しむレクリエーションの社会的定着を期待する傾向が伺える。

㊦に関する自由感想については若い感覚で批判的な意見が多い。纏まりが無い。演出時間が短い、目まぐるしいだけで味わい楽しめない、動きに新鮮味を取り入れようとする余りリズム本位になることは好ましくない、外国のミュージカル映画に比較して各人の動きが合わない、良い歌を踊りが壊している、出演者の練習不足、くだらないものがあり一考を要す、現代的リズムは却って聞き易くなるが本当の良さが失なわれないか等手厳しい批判が多く、服装が派手過ぎるが表現が豊かになった、女性の動きが活発になり良い傾向と思う等の肯定的意見を記述する学生は少ない。創作と表裏の関係にある美的鑑賞について恵まれる条件の少ない現実を残念に考えている。

舞踊創作は難かしいと批判されるのは、その構造が複雑多面的でありながら、客観的に観賞された場合は誰の眼からも美しい作品と受け留められる秩序だてられた基本的性格を必要とするからである。そこで表現活動の具体的場面では、客観的に舞踊を観賞する素地を育てる目標をもって小学一年より相互の模倣を見せ合う活動を重視している。引き続き六年では発表会形式をとり必ず鑑賞の機会を設け、次いで視点の広がりや鑑賞の態度の確立が期待されている。

㊧ 体育科各運動領域中指導が容易であると予想される順位について

(第三表) 体育科各運動領域中指導が容易と考えられる順位

(%)

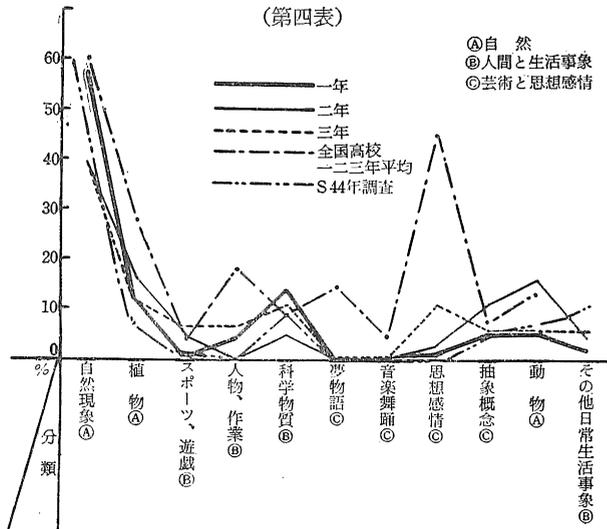
各領域	順位					
	1	2	3	4	5	6
徒手体操	16	40	17	16	13	5
	51	19	11	12	5	1
	16	30	18	23	11	3
陸上運動	6	24	21	10	18	21
	10	16	41	18	14	1
	8	16	10	19	25	23
器械運動	10	11	18	24	23	15
	1	11	16	33	34	4
	8	7	18	18	29	28
ボール運動	62	14	6	8	9	0
	35	36	16	8	5	0
	54	20	15	10	2	0
リズム運動	7	13	28	23	18	7
	5	11	13	24	30	17
	10	18	30	12	14	17
その他の運動	4	4	11	19	19	43
	0	4	0	2	25	69
	9	9	9	19	20	31

上段—S40年 石見部13校 出雲部13校 女子数論76名  
 中段—S41年 体育ダンスNo. I 受講生  
 下段—S44年 舞踊I a 受講生

総体的に予想通りの結果をみたのであるが、一年毎の経過に従って経験の表現の目的方法が理解され、その上にたつ技能習得は漸次向上するであろうとの期待が外れ、いかに創作指導のもつ問題が複雑であるかが理解できる。その他の運動の項目で水泳技術が修得できたので自信が持てると平均値が上回った実情は喜ばしい傾向である。

④ 表現・創作の題材に関する項

嘗ては幼稚園・小学校での公開授業担当者から模倣表現に適切な題材選択の相談を持ち込まれたり、学習指導の理想的な展開は総べて題材決定に関係している等の苦労話が聞かされた。(この夏休みは幼稚園、小学校より一例宛、表現学習内容の飛躍を願う相談を



受け、この道の研究を積重ねる先生方に随分と励まされる形となった。)本学においてもグループ創作の場合は少数であるが(本年度は9例中1例)抽象的題材か写実的題材かとその決定に困難をみる例が時折あり総合指導の必要を感じている。昭和40年度の本県の研究会において既に中学一年時の題材の選択が問題になっているが、写実的題材から抽象化への移行の時期と具体的指導法の究明が急がれている。成長発達に関する研究が急激に進展している現在でもあり、ダンスにおいても遅れてはならない。また教育的価値を多面的に発揮できる分野を受持つ自己表現活動では常に総合指導の適時性を考え、第二次性徴期の安定を欠く移行の時期を少しでも動揺を減少する切り抜け方を指導する方法が干要である。

模倣学習期の題材は「動物・乗物・遊び」から漸次発展的に取材し、仲良し組を基底にして他とのかかわり合い方を重視し与えられた情景の場面に適合するリズムを直感的に選択して動くことになる。この相手との関わり合い方は学年が進むに従って次第に複雑になるが、準じて動きのリズムも相手に調和さす手法として理解できる。次いで中学年では始め、なか、終わり、更に起承転結の連続性をもつ一つの作品へと移行する。表現学習期の題材は日常生活事象、自然現象の範囲より経験の豊富な題材が包括的な取り扱い方によって選択される。中学校期には課題式となり二つの課題から選択する技術に始まり、学年毎に三つの課題式・四つの課題より各グループに応じた個性的な題材を選択させる段階をとっている。高校期は一応自由題となり題材に適わしい員数を決定する作業も伴うので、所謂複雑な創作活動の手順をふまえた学習体験となる。青年前期は成熟に至る発展段階として急激な成長をみるために運動能力も高められる反面、美に対する感受性も深められて複雑な感情表現も可能になるので題材の選択は特に問題視されており、協力的なグループ表現の価値の理解に応じて複雑化の傾向がみられている。

第四表の題材選択の傾向は昭和39・40年調査の全国的高校1・2・3年と比較したのであるが、思想感情の高度な内容を必要とする抽象的題材に大きい差をみる他はおおよそ同傾向とみてよい。本学の場合は多人数講義の実情が各個人作品に対する評価の必要を生み、勢い与えられた創作所要時間を効果的に活用しなければならない状態となる。そこで経験の豊かな自信の持てる作品に対処する態度をとるのが一般的傾向である。言わば即興的作品の取り扱い方に属するが、これ等の作品のなかには印象に残る新鮮な内容・新鮮な動きの連続をもつ作品も決して少くない。例えば日本海を眼前に育った私にはこの題材以外に取り組み題材は無いと注釈を加えて踊った「海」、課題を与えられた夏休みに隠岐への旅行中「海」を観察して創作した作品も波の渦巻き躍りあがるリズムに感動を覚えさせられた。このように経験の表現が創作のための素地となるが、深く感銘を受けた対象(題材)を身体を持つ各人それぞれ特色のある動きのリズムで表現するために、動きを根幹とした対象の観察のしかた——特徴の捕え方、連続発展のさせ方を含めて——が重要になる。その一般的にとらえ方の傾向を知り、次のグループ活動による段階的作品指導に備えようとするものである。

㊦ 個人作品の運動要因追跡

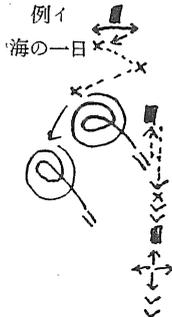
(第五表)

△伏す △ 床上の動き・片膝・両膝の動き ○ 中高の動き ⇄ 左右の移動 ■ 直立態勢 ○ 脱力…歩走・大股歩・横転→動きの種々 ∞ 移動を主とする種々の動き  
 ~~~ 振動 ~~~ 柔軟性の動き □ 直立 △ 方向変換 × 強い跳躍・足音を出して跳ぶ ※ 自転 ● 床上を叩く ◎ 静止 // 倒の動き || 蛇動 ⊙ 緊張 ■ 前転

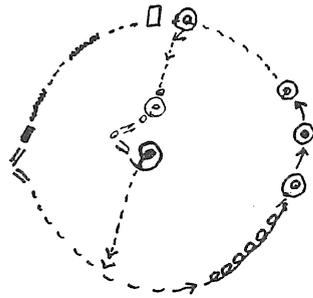
1. 単純前進型 (22%)



2. 前進移動型 (21%)

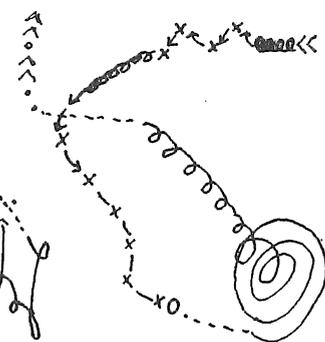


3. 回転移動型 (16%)

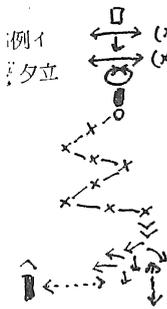


6. 多様踊跡型 (29%)

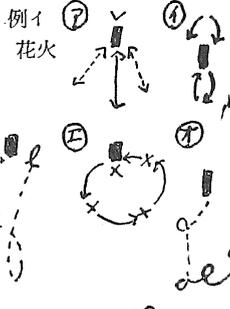
例イ 風と紙屑



4. 左右相称前進型 (7%)

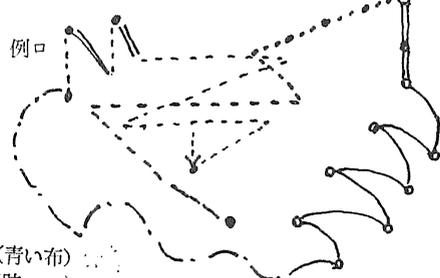


5. 同一場反復型 (4%)

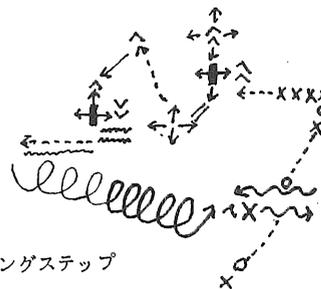


6 例ロ

波 (青い布) の踊跡



例ハ 夏の火の風物詩



- ツーステップ
- 小走り
- == 勢いよく走る
- ウォーキングステップ
- 脱力
- その場に止まる

単純前進型に属する作品「野球」の例は極めて珍しい作品構成で、この作者は基本技能練習・応用技能練習時は優れた動きのリズムを発揮し常に示範を求められる程の技能を有していた。然しこの技能が作品創作に全く活かされなかった特例である。十分動ける身体でありながら創作活動に転移できなかった原因を追求する必要はあるがその究明はなかなか至難である。一般的に言える点は創作経験に乏しいとか、作品構成の複雑な機能に関する理解が不十分、また題材選択基準の誤りなどがあげられるだろう。

単純前進型に含められる作品（ ）は無作為抽出作品の経過時間——浜辺、海の一日（2'07"）、夕立（55"）、花火、しぶき、野球（2'37"）台風、波、落雷、水の流れ、花の一生、風に吹かれて揺れる稲穂、とんぼ、木の葉（1'23"）、朝顔、たんぽぽ、海、嵐、波紋、波に写ったネオンサイン、夕方の海（1'05"）夏の空、夕立と入道雲、川の流れ（48"）。

移動前進型——砂紋、夏の海の日（2'46"）、落葉、波、暗闇、太陽。

回転移動型——波、夜明け、枯葉、蝶々、雲そして雷、蛙（4'03"）しけと小舟（1'55"）、栗の実、花（1'03"）。

左右相称前進型——草（1'04"）、夕立（1'02"）、波、雪（1'44"）、海。

その場反復型——海底の海藻（1'18"）、砂漠（2'39"）、炎、

多様跡跡型——日本海の波（2'37"）、流れの一生、風、湖、嵐、夏の夜空に消える星、しぶき、俄か雨、風の仕業、夕立（2'30"）、波（1'25"）、夏の火の風物詩、夕立、とんぼ、風と紙屑（1'38"）、蚊の生態（4'16"）

以上の題材にみられるように自由題による個人作品は、題材選択範囲の広がりとは各個人独特な手法により内容を美しい動きに転移させて可能な限りに個性的な美を発揮した作品と言える。また無作意抽出による作品26の平均所要時間は2分03秒であるが、創作所要時間・動きの可動範囲・創作経験等から推察して一応妥当な時間と考えられている。

運動要因の取り扱いについては過渡期の措置として発達段階に応じた規制がなされた。例えば小学校低学年においては歩・走・跳躍・屈伸を主にして情景展開の動きのリズムを模倣きすなど提示されたが、児童のよここぶ模倣表現のなかには示された要因以上の豊かな運動が結合されている実情から規制は自然にとり除かれるようになった。

現在運動要因として歩・走・跳躍・拳振・振動・屈伸・押引・回旋・自転・回転・移動を伴う回転・倒・平均・波動・蛇動・緊張・解緊・弛緩・ずらすを単独、二つ三つの因子結合・時間的条件・空間的条件・美的条件等の結合によって基本練習、応用練習に具え個人技能集団技能に活用して創作への重要な手がかりとなっている。

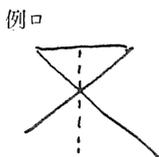
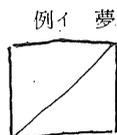
#### ① 個人作品の舞踊跡

第五表運動追跡調査は昭和41年度、第六表は昭和43年度における舞踊径路に関する調査であるが個人作品内容が年年複雑化の傾向をみるので類似踊跡を纏めたり整理の必要から分離独立させた径路型もある。両者共に個人作品完成後創作者に運動因子追跡または径路追跡を実施す

る方法を取り、あくまでも創作態度の自主性を保つ努力を続けた。然し運動追跡を主にする作業の場合は径路の追跡は頗る曖昧になり、径路追跡の方法をとる場合は追跡が強調され多少複雑になる傾向が認められる。創作過程における動きと径路の取り扱い方の様相は、相当の個人差は考えられるが一般的にみた場合は動きのリズムの追求が主となり、内容をよりよく表現す

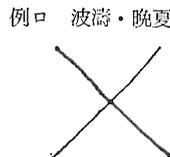
(第六表)

1. 幾可的径路 (9%)



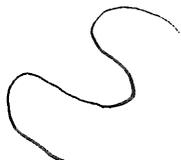
- ・芽ばえ
- ・蝶々と罨
- ・海岸に照りつける太陽

2. 直線的径路 (40%)



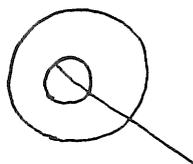
3. 曲線的径路 (6%)

例イ 或る夏の日の空と海

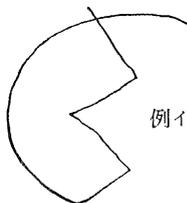


4. 円的径路 (11%)

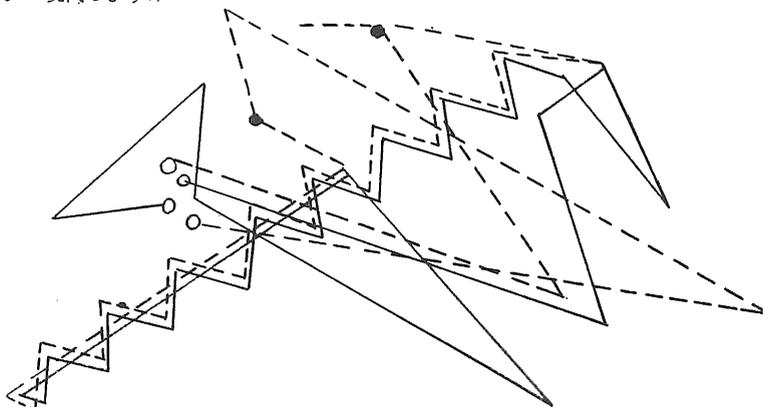
例イ 台風・木の葉・沼の鳥 例ロ 木の葉が風に舞って

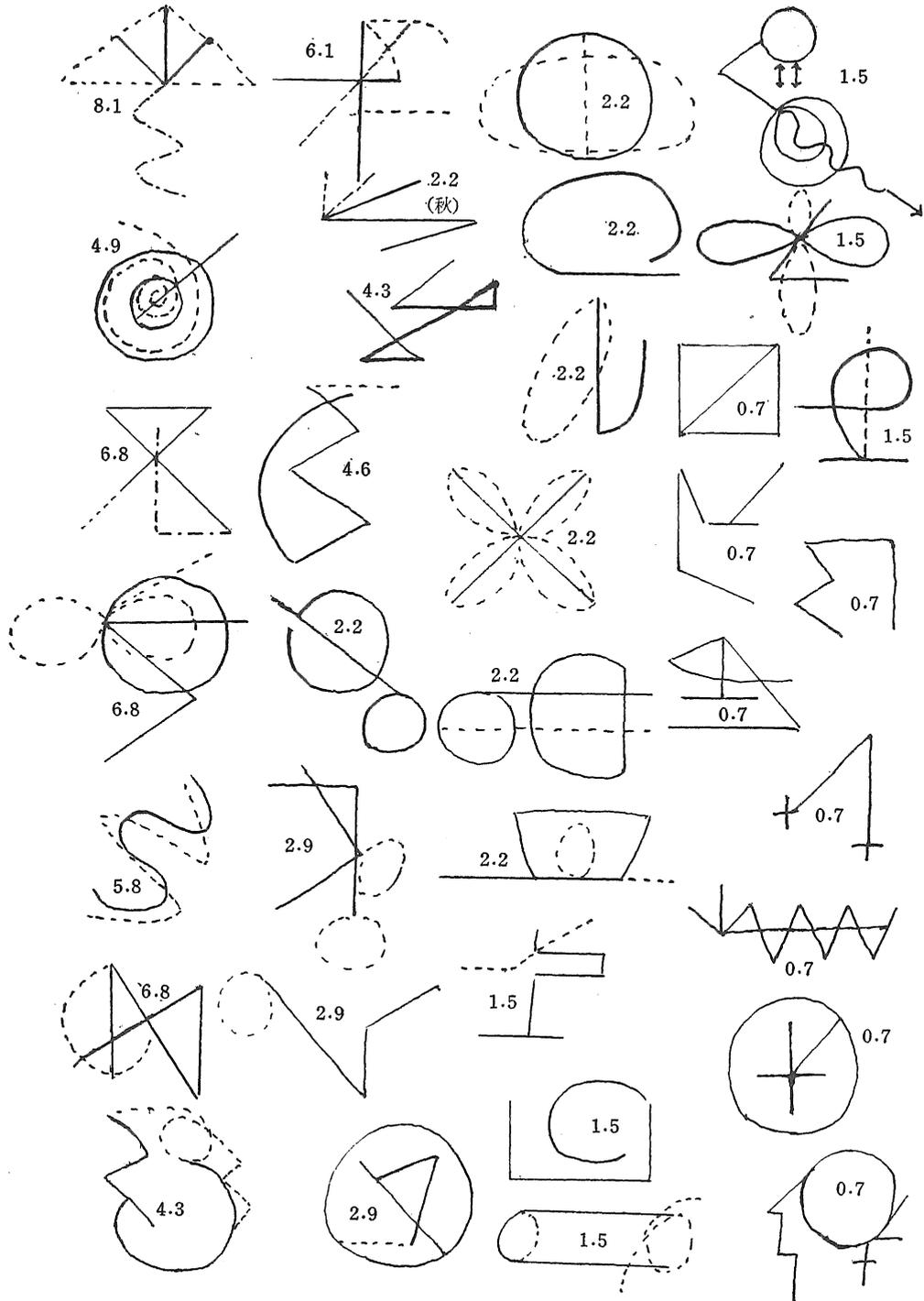


5. 直・曲線結合的径路 (33%)



6. 現代のひずみ





る径路の效果的追求が稀薄になる傾向が伺われる。体育専攻生の個人作品で径路の取り扱い方が主となる雨滴の題で創作中、鋭角の移動に執着する余り動きの因子が結び付かず困惑する状

態に接した例もある。

作品「秋」は踊跡を主に考察すると最も単純な手法に属するが、秋の内容を動きに移した感覚が優秀で、落付いた広がりの中に秋の感傷的な雰囲気完全に盛り込まれた秀逸作である。作品「雷雨」は移動の過程における方向変換が効果的手法になって良い作品となる。即ちリズムの時間性と空間的処理が優れたアイデアによって作品価値を高める要素結合となる例である。「通勤電車」は写実的内容を忠実に貫通させ、走・屈伸・回旋・回転・倒・緊張・施緩等の運動要因を縦横に組み合わせて作品効果を出している。また「野原の世界」は消える雲が雨となり斜左方向に去る終止の取り扱い方が作品全体を引き締めて佳作となる。創作者として「これではなければならぬ」と何かを見出したとき、何かを鋭く感じたとき……それは題材であれ、内容、身体の動きの持つ美の強調、径路に託する内容の追求、変わったリズム、迫力をこめた踊り方であれその作品は観る者を必ず美的境地へ誘い込むと考えてよかろう。然し舞踊経験の少ない者の踊り方には最終的技法と言える眼のつけ所、指先を含めた手の表情の豊かさは望めない。そしてこの手の表情が作品全体を阻害する場合は妙味の少ない作品になってしまう。

#### ⑧ 個人作品にみられる径路の分析

舞踊は歩に始まって歩に終わると言われるのは移動による美の追求とも解され、また動きを連続する手法として最も効果的存在とも解釈してよかろう。舞踊創作経験の少ない者は先ず移動する。不思議な程よく移動する。右方へ移動し次に元の場所へ戻り、人間の身体構造がそうである故か、異時性シンメトリーの手法が自然に身につけて次には左方へと経続される。または前進して元の場へと後進する移動型態が非常に多い。創作者に題材を示された場合径路を予想をするが実際の移動が予想通りの踊跡をとる作品は矢張り面白味の少ない創作という感想を抱かせるのが多い。勿論とりあげられた動きのリズムの優美軽妙さに眩惑される場合は移動の方法が全く問題にならないのが普通である。また練りに練って創作した作品は表六の例6のように見方によっては踊跡だけで美を感知する場合もある。

本年度は舞踊研究班の基本練習ⅠⅡに伴奏曲ができ矢張りピアノ曲に乗って踊る楽しさが聞かされているが、出来上った基本練習は総べて前方移動または斜前方移動で後方移動は応用的取り扱い方のなかに現われるだけである。踊り始めのその場活用の動きの在り方を種々考慮し創作に先立つ心構えの一つとして注視しなければならないであろう。

個人作品に見られる径路の特性を更に第七表について考察してみる。

径路の分析は創作者自身の移動分析を筆者が鑑賞者の立場からの分析を総合した結果による。またこの年度は三年受講生が多く、音楽を専攻する学生も交る状態から一二年を圧倒する雰囲気を醸し出して、基本練習・グループ作品創作に参加していた。そこで創作舞踊は難かしいとの声を学外学内から聞かされていた時期でもあり、受講学年の適切な時期を見討たいねらいも含めたものである。

径路のとらえ方は31種類となり更に6種に分類できる。

(第七表) A

数字=頻数

| 学年 | 移動の型 | 右方移動 | 左方移動 | 左方右方往復    | 不完全往復  | 斜行前進(ジグザグ) | 変型斜前進 | 前進 | 後進      | 前進後進連続    | 右斜前進  | 左斜前進  | 斜右往復  | 斜左往復  | 斜右後進 | 斜左後進     | 斜右後復 |
|----|------|------|------|-----------|--------|------------|-------|----|---------|-----------|-------|-------|-------|-------|------|----------|------|
|    | 移動の型 | 斜左後復 | S字移動 | 導入部と終止の統一 | 螺旋状の移動 | 孤の移動       | 楕円    | 自転 | 移動を伴う回転 | 自転を伴う回転移動 | 楕円の移動 | 8の字回転 | 三角型移動 | 四角型移動 | 蛇行   | 自転を伴う前後進 |      |
| 1  |      | 32   | 69   | 51        | 2      | 21         | 11    | 62 | 24      | 24        | 69    | 46    | 6     | 2     | 35   | 31       | 7    |
| 2  |      | 42   | 39   | 26        | 18     | 21         | 50    | 8  | 11      | 100       | 61    | 5     | 8     | 21    | 34   | 0        | 0    |
| 3  |      | 72   | 11   | 50        | 11     | 39         | 61    | 11 | 33      | 28        | 61    | 22    | 8     | 11    | 5    | 0        | 0    |
| 1  |      | 12   | 5    | 11        | 0      | 13         | 2     | 51 | 55      | 30        | 7     | 2     | 4     | 2     | 2    | 1        |      |
| 2  |      | 3    | 5    | 0         | 8      | 3          | 8     | 55 | 3       | 3         | 16    | 11    | 5     | 0     | 0    | 3        |      |
| 3  |      | 0    | 0    | 5         | 0      | 0          | 8     | 28 | 0       | 5         | 0     | 11    | 5     | 0     | 0    | 0        |      |

(第七表) B

| 学年 | 移動数 | 3 | 3  | 4  | 5  | 6  | 7  | 8  | 9  | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 |
|----|-----|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
|    | 1   |   | 2  | 6  | 8  | 27 | 13 | 8  | 11 | 5  | 6  | 5  | 2  | 0  | 4  | 0  | 0  | 1  | 0  |
| 2  |     | 3 | 18 | 26 | 18 | 8  | 3  | 13 | 8  | 0  | 0  | 0  | 0  | 0  | 3  | 0  | 0  | 0  | 0  |
| 3  |     | 0 | 39 | 11 | 11 | 6  | 17 | 6  | 6  | 0  | 6  | 0  | 0  | 0  | 0  | 0  | 0  | 0  | 0  |

(第七表) C 個人作品にみられる径路の分類

(%)

|       |           | 学 年                                      |    |    |    |
|-------|-----------|------------------------------------------|----|----|----|
|       |           | 1                                        | 2  | 3  |    |
| 水平的径路 | 左右移動型     | 右方左方移動 左右往復型<br>左右不完全往復型                 | 22 | 22 | 30 |
|       | 前後移動型     | 斜行前進, 変型斜前進, 前進のみ, 前後進連続, 左・右斜前進, 斜右・左往復 | 35 | 48 | 50 |
|       | 後方移動型     | 後進, 斜右・左往復<br>斜右後往復<br>斜左後往復             | 16 | 9  | 8  |
| 立体的径路 | 回転移動型     | 自転・螺旋的移動<br>自転を伴う回転移動<br>自転を伴う前後進        | 20 | 13 | 7  |
|       | 準回転移動型    | S字, 孤の移動, 楕円, 楕円的移動, 8の字回転, 蛇行           | 5  | 8  | 4  |
| 中間的径路 | 幾可的移動型    | 三角型移動<br>四角型移動                           | 1  | 0  | 1  |
| その他   | 導入部と終止の統一 |                                          | 2  | 0  | 1  |

- ④ 左右移動関係——右方移動，左方移動，左右往復，不完全往復型
- ⑤ 前進関係——斜方前進，変型斜前進，前進，前進後進連続，右斜前進，左斜前進，斜右往復，斜左往復。
- ⑥ 後方移動関係　後進，斜右後進，斜左後進，斜右後進往復，斜左後進往復。
- ⑦ 回転関係——自転，移動を伴う回転，自転を伴う前後進，螺旋状の移行，自転を伴う回転移動。
- ⑧ 準回転移動関係——弧，楕円型移動，S字移動，8の字回転，蛇行。
- ⑨ 幾可型的移動関係——三角型，四角型移動。
- ⑩ そ の 他——導入部と終止の統一。

本田教諭が且て昌子舞踊研究所生だった頃，ワルツ曲の創作発表があり，自転運動を主体にした動きの美が衣裳のもつ回転美に強調され観客を魅了した作品があった。水平運動の多い人間の身体を素材にして特に立体的運動の重視に努め舞踊の最大の効果を狙った作品である。また最近では合成繊維による衣裳その他の工夫が盛んに行なわれているが，回転運動の美を強調しよいよ複雑にして，眼を凝らう程の妖しい布の性格のもつ陰影の微妙さは，布，衣裳を主体にした象徴的舞踊の未来も考えられてくる。

回転運動中自転運動は古典バレエ技術の焦点とも言われ古くから重要な技術として扱われていたが，最近では益々スピードを増し回転数も多くなり，更に次に連結される困難な静止，保持の技術に至っては身体的芸術美の極地そのものである。この回転運動は小学校高学年より活用される基礎的技能に属するが，正しい技術習得には相当の日時を要する。然しテレビ鑑賞その他によって最も影響を受け易く軽快にターンをしてみたい舞踊的感情は舞踊の最大の魅力となっている。

昭和39年乃木小学校において数少ない男子リズム運動研究者の岸本進教諭が，鳥取砂丘へ遠足後砂丘の題材で各グループ活動による学習発表を実施した。砂丘の題材は抽象的で困難な対象に属するが，男児は倒立転回で太陽の輝きを表現し女児は長座態勢となって波動を主とする砂紋（或いは波）の表現した一グループの発表をみて，男児と女児の特徴を表現した動きの対照的な美，倒れのもつ立体的な量感を直接的に表現したアイデアの良さに感銘を受けた。同時に指導者は傍で勇壮なシンバルによるタクトをどっていたが，各グループ毎による自由な解釈で動きを合わせ，立派に同時発表を終了した手際の良さに感服させられた。また同時発表の目次教諭指導の学習発表には基本運動の主体的活動として男児リーダーが片臂上挙，脱力の困難な技術に取り組んでいたのが印象に残っている。

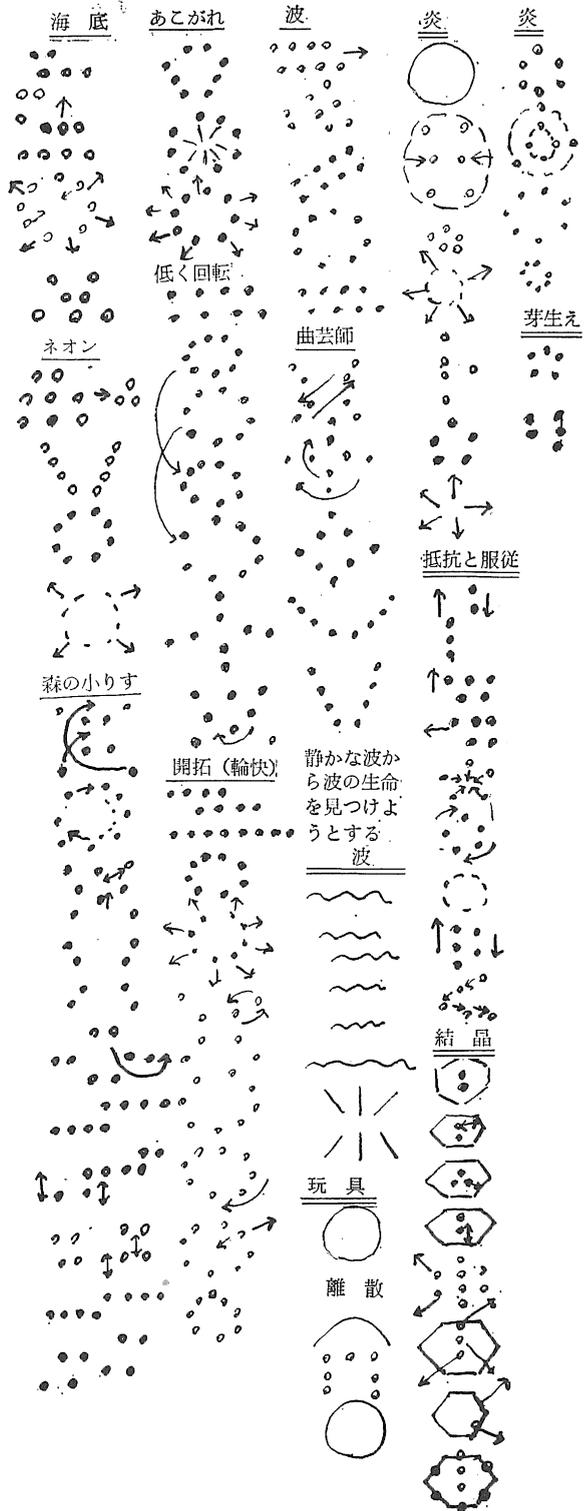
創作技術上従来の古典バレエには全く見られなかったモダンダンス的技術である倒立転回は，回転などと共に小学校五年にみられる心身の調和的発達の時点を頂点とする巧緻・機敏に終止する技術である。流石に成熟期ともなれば回転使用率は減少し一年20%，2年13%，3年7%となる。ただし立体的手法を強調する構成は運動因子の選択結合によっても可能になり，ま

た速度感の変化・遠近法の取り扱い方によっても可能になるので回転率いかんだけではその舞踊が水平的か立体的かが推意できないのは当然である。

次に左右経路と前後経路の特性について述べる。両者を比較する場合は身体的面の表現性が関連する。左右相称で安定感の強い身体の前面と背面は特徴の著しい明と暗の関係となり、側面は前面と背面を共に具えながら身体的屈曲は相称的安定とは違った陰影のある力動感が溢れてくる。前後経路型は背面のもつ表現的価値を活用せずに正面に対しての態勢で後進する手法が多いので動きを変化に導く要素を減少する。左右経路をとる表現は正面に対して完全な側面を使用して表現内容を豊かに導く手法は少ないが、正面に対して常に等路離である点において、また往々にして側面に接近する態勢を維持し易い関係上移動による表現性を強調できる。

次に表現の主要な原理として必ず挙げられる遠近感覚について考えた場合は、左右経路をとる表現技法と前後進のそれとは異なる内容を視覚に与える。そして更に前進を強調する運動因子・速度リズムの時間性に影響されると漸強から強大または漸弱から弱小の感じを生じる表現となり左右経路より巾広い表現力の効果を期待できるのが一般的現象であ

(第八表)



る。この技法は基本練習に必ず組み入れているが短時間で創作を完了する立場をとる場合は、とにかく動きの機能的側面を楽しみ、内容を深く吟味して幾種類か考えられる表現法を選択決定する緻密さに欠けるのも当然であろうと考察している。

表七Aにみられるように1年は各径路を2年3年に比較して平均的にとらえ、表七Bのように移動変化数も同様に5・6・8種類51%——1年、5・6・8種類39%——2年、3年は23%となり変化数の低下を示している。移動数13・14種類以上に及ぶ作品は単なる変化のための変化が作品の主要部分を占め、統一の美に欠ける傾向がよく考察できる。勿論径路の変化数の大小移動の方法の安定度等で簡単に作品の優劣は決め難いが、試みに各学年の簡単な作品評価の結果は、上位群3年(83%)、2年(46%)、1年(51%)となり、下位群3年(6%)、2年(8%)、1年(13%)となっている。この結果を加えて一応考察してみる。大学生活経験のいかんによって滲み出る落付ある態度は題材・内容に感情を遺憾なく移入できる結果、表現美を感知させる内面性の表出技法となる。更に生活経験に密着した題材選択の適切、内容の着実なとらえ方、観察力洞察力の豊かさは動きのリズムを豊富にし、内容に適合した径路、主になる動きは一応安定した発展法をとり総合表現力は変化と統一の美的原理を理解している、またはそれに接近していると考えられる。その結果高められた創作表現技術に結び付きやすいと考察できる。

昭和36年横田中学校における研究授業に備えた創作過程の観察によると、1グループを除き、全部中心向きの円隊型より活動を開始した。総べて創作活動にみられる話し合いの進行を容易にする隊型で、動きながら話し合い、話し合いながら動く必要を満たす隊型である。また或中学の例では研究授業に備えて隊型の変化を主体にした全体指導より創作活動を開始した結果、内容をよりよく表現する為の隊型の変化でなく、概念化された取り扱い方となり、表現独自の追求が稀薄になる懸念も出ていた。

日本の学校ダンスは外国民踊に影響された時期が長過ぎた結果、グループ創作活動は円隊型で開始される作品が多いと単純な批判もあった。然し円型に依る動きの開始は員数のいかに拘らず、成員に対し均等の重みをもつ他との交わり合い方で活動に参加できる形態を要望し、必然的に円的型隊をとると考察している。

県立出雲商業高校1年および本年度本学部舞踊Ⅰの作品を比較してみる。両者には年令差・創作年度差はあるが、創作経験は同等とみられ一般的表現能力を基盤とした作品創作期と見なされ、更に後者の創作所要時数は3:1の割合に近く即興的作品参加の態度を強調した事情も加わって、両者の作品価値は近似する要素が多いとみられる。

完全線的变化型——海底・波に対し波・結晶が属する

完全円的变化型——開拓と炎が属する

混合径路型(円・半円・変型円・離散)——ネオンサイン・あこがれ・曲芸師・森の小栗鼠に対し玩具・抵抗と服従・芽生え・嵐が属する。両者共に一重・二重円・集合・離散(結果的

には円もある。)、孤・斜並行重線・三重並行線・二重線対孤・不正四角型等がみられ、表大学には二重線対孤・二重素の群・点・不正四角型がみられる。また表高校には並行的反復・三重円・離散十字型・変型四重線型等がみられ多様化の傾向が強いが、その径路が員数には場のとらえ方に始まり、更に内容を適格に現わす運動因子の結び付き方を解明出来ない場合は、径路の妥当性・表現の適合の度合は予知できない。然し個人作品にみられる自由多彩な径路選択決定の活動能力は、集団創作活動の結果において最も単純素朴な線的・円型・混合型という図型素地範囲内の径路に終止すると言える。線的径路傾向をもつ集団と円的径路傾向をもつ集団がそれぞれ採択したこれ等の要素数を比較すると23：20に対し22：26と殆んど変らない移動内容をもっていることが理解できる。結極題材・内容・モチーフ・フレーズ等に適合した径路が小集団活動によって容易にとりあげられる傾向が認められる。

⑥ 即興的動きの生み出しに関する項

個人作品についても特に小集団活動による作品創作過程についても必ず問題になるのは「よい動きの生みだし・主になる動きの生みだしに関連する事がらである。表八においては調査人員59%（41年）、69%（43年）は内容に適した動きの生みだしに困難を感じ、出雲商校1年では2週目（78%）、3週目（74%）、4週目（79%）と動きの内容に関する問題が多くなっている。更に後者では生徒が考えた解決法は、2週目（70%）、3週（56%）、4週（46%）

（第九表） グループ創作活動中体験した問題点

|                            |                       |                             | S 41 年 | S 44 年 |
|----------------------------|-----------------------|-----------------------------|--------|--------|
| 技<br>術<br>的<br>問<br>題<br>点 | イ                     | 内容に適した動きの生み出しに苦労する。         | 22%    | 22%    |
|                            | ロ                     | 作品完成には時間が足りない。              | 16     | 11     |
|                            | ハ                     | 思いついたことを直ぐ動きに現わすことを迷う。      | 1      | 10     |
|                            | ニ                     | 動きを考えてもその発展ができ難い。           | 13     | 17     |
|                            | ホ                     | 感じたことを直ぐ動きに表現できるが満足できない。    | 15     | 10     |
|                            | ヘ                     | フォークダンスのような簡単な型になる。         | 6      | 5      |
|                            | ト                     | 二つ三つの動きが結びつけられない。           | 6      | 9      |
|                            | チ                     | 動きの基本練習時間が不足である。            | 6      | 5      |
|                            | リ                     | 徒手体操の動きになりがち。               | 5      | 7      |
|                            | ヌ                     | 自分の考えた動きがなかなか取り上げて貰えない。     | 9      | 2      |
| ル                          | 他の成員の作った動きが気に入らず踊り難い。 | 1                           | 2      |        |
| 精<br>神<br>的<br>問<br>題<br>点 | イ                     | 体操クラブ又はこれらに類したクラブ員の意見に傾き易い。 | 16     | 9      |
|                            | ロ                     | 人気のある人の意見に傾き易い。             | 16     | 6      |
|                            | ハ                     | 反対者がいて纏まり難い。                | 8      | 13     |
|                            | ニ                     | 自分は余り反対できない。                | 8      | 15     |
|                            | ホ                     | グループ活動中傍観的態度のものが多い。         | 13     | 26     |
|                            | ヘ                     | 自分は引っ込みがちである。               | 23     | —      |
|                            | ト                     | 役割の仕方に不満を持ったことがある。          | —      | 2      |
|                            | チ                     | 理屈の多い人から圧力を受けた。             | —      | 3      |
| リ                          | 特になし                  | 9                           | 15     |        |
| ヌ                          | 無 解 答                 | 9                           | 11     |        |

となり、創作過程の問題点が多く活動内容に逆比例して、生徒の思考範囲での解決策は稀薄になる傾向がみられる。5人の集団活動では少なくとも5種類以上の異なった動きが案出されるのが普通の状態であり、動き決定に時間差が生じ、他人の動きを受け入れる容認の態度にも個人差の伴う難かしい条件が伴う。

これ等動きの生みだしに関する問題点を探るねらいを以て数年前より実施している一連の方法について述べる。

(第十表) 即興的動きの生み出しに関する調査(条件の与え方は番号順)

対象人員 93名(%)

| 種目    | 上肢 | 直     | 直     | 直曲    | 直曲    | 直    | 曲     | 曲    | 直曲   | 曲     |
|-------|----|-------|-------|-------|-------|------|-------|------|------|-------|
|       | 下肢 | 直     | 直曲    | 直     | 直曲    | 曲    | 直     | 直曲   | 曲    | 曲     |
| ① 基本  |    | 4.35  | 14.13 | 2.17  | 27.17 | 6.52 | 2.17  | 6.52 | 9.78 | 27.15 |
| ② 1呼間 |    | 13.04 | 44.57 | 5.48  | 18.48 | 4.35 | 4.35  | 2.18 | 1.09 | 6.52  |
| ③ 彫刻  |    | 13.19 | 16.48 | 17.58 | 20.88 | 3.30 | 14.29 | 5.50 | 3.30 | 4.40  |
| ④ 2呼間 |    | 5.48  | 31.53 | 2.17  | 36.96 | 6.52 | 3.26  | 7.61 | 5.48 | 1.09  |
| ⑤ 自然  |    | 11.83 | 13.98 | 4.31  | 38.71 | 3.23 | 4.31  | 3.23 | 4.31 | 16.13 |
| ⑥ リズム |    | 7.53  | 32.26 | 13.98 | 20.43 | 5.38 | 3.23  | 6.46 | 6.46 | 4.31  |

直=直線的

曲=曲線的

直曲=片腕-直線的) 上段-上肢  
片腕-曲線的) 下段-下肢

(例)

(ア) 基本運動をつくる……①

樹木……山の木樹枝をふるわせると体を低くして回転する

上肢-直, 直, 直, 直=直

下肢-直, 曲, 曲, 曲=曲

(イ) 全身の大きい回旋運動=曲, 曲

(ウ) 腕, 上挙跳んで脱力=直と曲

即興的動きの生みだしに関する調査は次の番号により各種条件を与える。

- ① 小学校高学年時に適当とみられる課題を与えて基本運動をつくる。
- ② タンブリンで一呼間の動きを創り保持した状態。
- ③ 美しい彫刻によるイメージを与えて②の方法で動きを創り保持する。
- ④ ②を与えられた2呼間の音で動きを即興的に創る。
- ⑤ 自然現象を対象にして2タクトで構成されるリズムを創る。
- ⑥ ♪♪♪ (おおよそ *moderato*) のリズムを与えて即興的に動きを創る。

例年実施の方法は各グループのリーダーが与えられた条件の動きを創り、各成員はリーダー考案の動きを完全模倣する。毎回リーダーは交代し新鮮な動きを生み出す為に緊張感を促す。また各集団間に必然的に現われる対照・類似・強調・変化・水準差・方向・相称・並行・反行等が次々出現する実態を活用して空間構成に関する美の要因・統一と変化の美的原理形態に関する理解を深めようとするものである。44年度45年度は以上の練習過程を基に表十の実験

を試ろみた。方法は各個人に記録紙を与え、創った動きの因子を図系と文章表現により動きの再生を図り筆者が因子分析をして纏めた。タンブリンで規定する速度は大體 Lento に属するが、實際活動では開始の音を確認した後は、タクトを外れてもそれぞれ納得できる動きの構成に努め速度に対する自由解釈の傾向が強く認められた。

表九については上肢——直線的、下肢——直線の部は最も単純な動き創りとなり、表右への移行に従って動きは複雑となる。課題①に対しては各自納得のできるまで所要時間を当てたい希望が強く、結果は予想通り自然による動きの生みだしと共に最も変化のあるリズム出現となっている。1呼間で創る動きは単調に流れ過ぎ、上肢——直線的・下肢——直線曲線の結合が45%となり勢い直線的要素が強くなる。同条件で二呼間の動きを創る際は1呼目で主に上肢、次いで二呼目は下肢の移動を伴う強運動となり、前者に比較して多少曲線的要素が上回る傾向が常に観察されている。③に関しては「美しく彫刻された像」と規定する関係上、複雑な運動要因は減少し簡潔な纏まりを追求する傾向がみられる。自然に関するリズム設定は最も身近なリズムとしてとらえ易く、複雑な運動要因は基本的動きに次いで多様性をもっている。⑥のリズムを与える条件に関しては決定されたリズム型に問題があったと認めているが、変化のある動きを誘発する条件を備える為には、数限り無く存在するリズム型から何を選択決定するかが重要になるので、更に調査を重ね動き生みだしの問題に対処したいと考えている。昭和43年後期の頃、舞踊研究班の基礎的動きの生みだしの目標をもって諸種の練習を行なった。決められた2・3の舞踊的運動要因を結合して動く、特定の径路を個人または2人組に与える、二群のコントラストする動き作りの一条件を与える、具体的表現対象を与える等の練習法のなかで最も効果的方法は定型のリズム（例えば）♪♪ ♪♪ ♪♪ ♪♪ を与え、各人各様の動きのなかから適当に結合して一つの練習形態に導く方法が良い動きの生みだしになるという結果が判明している。

この体験からリズムパターンを与える練習法により豊かな動きを生み出す動機としたのであるが、次の段階指導としては自然現象・日常生活事象の範囲から選択した具体的題材内容をもつ優れたリズムパターンとに結合できる動きを与えたい。然しどちらを優先して実施するのが効果的であるかは實際調査に待ちたいと考えている。

内容に適した動きの生みだしは常に問題の焦点となるのであるが、運動要因の決定またはその展開が直感的に思考推意できる内容が創作開始を容易にするのであって、動きを誘導できる内容を設定できない題材選択は不適格と言ってよからう。このような問題を減少するねらいもあって、小学校低学年については指導者が選択し、その方向で児童に選択させる機会も与え、次いで包括的取り扱いより巾のある課題式、更に自由課題という段階性を明確にしている。徒らに新奇な題材を追ういき方より、同じ題材に対しその年度の児童がどのように表現し、何を問題にしてつまづきを見せるか、対象を根気よく観察できる学習指導のあり方が、よりよい創作指導方法論を生む手がかりになるのかも知れない。

動きの発展のさせ方には幾種類かの手法が舞踊専門家達によって主張されている。音楽の優れた動機の発展理論を転移させたり、最も基本的とみられる動きの変化のさせ方として動機に対し水準・方向・面を変える、移動法を加える、動機の一部の動きを変える、リズムを変える、アクセント、動機の全体的速度を適宜とり換える方法等である。教育としての舞踊創作においては、動きの生みだしなどその展開連結法を決定した題材から、どのように内容を押えるかそのとらえ方が作品の優劣を一応決定するといつてよい。舞踊演習の創作活動に対して内容をどのようにとりあげるか文章表現を試みた結果個人差の激しい様相に驚かされた。その文章が一行で終了するのもあれば、読んだ瞬間豊かな動きの連続が予想できたり、内容を吟味する以前に作品が完成してしまう舞踊研究班の例もある。舞踊が内容を深くそして自由に現わす傾向は世界的現象であつて、その先駆けとなつた新舞踊は古典バレエの形式構成美に完全に対抗する新理論をうちたて、更に多くの実践家達の研究により変容改革されて今日に至つてゐる。然しその過程において極端な無音楽舞踊などを生んだ歴史的事実は、後世の舞踊界に多くの波紋を投げたと見られ、また日本の舞踊界もその影響を受けなかつたとは決して言えない実状もあつたと推察している。

前に述べた動きの生みだし・発展のさせ方は既に模倣表現の段階（小学校1年～4年）で学習を終了し創作表現の準備段階に移行するのが望ましい。例えば動物の生活や動態を模倣するリズムの取り扱い方の過程に変化・発展の原始的型態が注入されていなければならない。例えば3年の模型づくりの題材の取り扱い方の骨子は作品の始め、なか・終わりの展開理解と共に模型のもつリズムの組み合わせ方が幾種類も思考されなければならない。またその組み合わせ方がタクト・スピード・リズム・アクセントの変化に応じられる柔軟性を持ち、リズムの変化活用も徹底的に学習させる必要がある。殊にダンスの学習指導では成長発達の特性に於て題材・内容のおさえ方、展開の方法、発表のさせ方、鑑賞の視点等が明確にされているので学習計画は容易にできる。

#### IV お わ り に

創作舞踊とは？→創作は判らない→創作は難かしい→遊びをもつ創作学習に備えるにはと目標接近をみて今日に至り舞踊指導者の研究的態度が実つたというさきやかな実感がある。

十年一昔であるが……一昔前は創作は嫌いですと判明否定する雰囲気の中かで、眼前でとに角動いて貰わなくては授業にならない。学生の基礎練習・初歩的創作に対して総べて肯定的態度で臨み、对人的緊張感を和らげる努力を続けた時期は決して短くなかつた。44年度調査の一項目——他人の面前で全身を呈して踊る行動に抵抗を感じるかについては、感じる（57%）、感じない（36%）、時々・その他（7%）についても舞踊の特性が理解できる。

この創作問題理解の困難な実情に鑑み、文部省は創作舞踊指導法の理解と学習内容伝達の為

に、最初は3年・引き続き5年計画を樹て、各ブロック別に大規模な講習会が開催され、教師達は児童生徒の動きの予想によって動きを生みだし展開させる創作活動に汗を流し、動きの豊富な作品を鑑賞しては小品ながら自分達の創作した事実に充実感をもつという原始的創作態度であった。

本年度島大附属中学におけるダンス学習指導は参考になった。作品完成は七週で教生は一週宛受持って指導する。毎週それぞれ教生は個性的な運動要因連結を考案しこれに基いた準備的練習より学習が開始される。それは一部ジャズの要素を含み、幾分は徒手体操的、ロマンチズムに溢れる、芽生えを予想したリズム結合は完璧であった等を中学一年なりに消化した動きをレコードにのせて楽しんでいる。創作過程では教生指導教官もグループ活動に入り一緒に踊る状態となり創作ムードは最高の盛り上がりだった。

この基本運動に関連して筆者も有効な方法論——踊る身体づくりを導き出すねらいを以て、相当内容を変更して今日に至っている。一時は無表情な胴体の訓練として胴を中心とした緊張解緊運動の組み合わせによる柔軟性を強調したが練習時数を多く必要とする実態から、最近では胴体を表現的に導くため下肢を厳しく鍛える方法に転換し、また脚を美しくするため足首（膝も関連する）の弾力性を強調する基本運動を実施している。そしてこれに関する重要な問題はこの運動を単なる基本運動として取り扱わず表現内容とのかかわりあいかたのなかから選択決定する在り方が表現技法を高める有効な方法となる。また創作技能を高める目標に近づく一方法としてはグループ学習活動の機能を十分に発揮できる措置をとらなくてはならない。話し合いのルールを理解し充実を図るためには、真の表現である自己主張と共に、自己の在り方を厳しく見討する態度を身につけることであろう。更にルール以前の問題もある。ある附属小学校でリズム運動指導者がグループ学習の困難な事態に敢然と対処した直後、その級その他科学習においては大きい学習机に参集した状態が、単なる機械的集合体だった。リズム運動学習の前途に多少の危惧を感じたのは事実である。

## V 今 後 の 課 題

「創作舞踊は理解し難い」という一般説に対して、できるだけ教育現場の事例を挙げて理解を容易にしたいと願った。

今後の課題としては、個人作品にみられる題材のとらえ方及び舞踊踊跡関係について、固定した概念の制約を乗り越えるために新しい方法を提示したい。個人作品は自由な個性美に溢れているが、移動法にみられる概念的手法の傾向を理解させ、それに立脚する指導を考えた場合どの程度の作品を創作するか比較研究してみる。グループ活動作品になると予想以上に類型化された作品になってしまう。これは視覚による外界認識が特に直線的機構が主軸となって知覚される所以で最近の社会環境は益々この傾向を強めると推察される。更に今ひとつの誘因を考えてみる。それは個人作品は題材・内容を動きに自由に移す完全な自己表現が主体となり、グ

ループ活動による表現においては、各自が安定する場の取り方が主体となり選択された動きがより容易に動ける為の必然的手法であろう。このグループ作品に現われる類型化を打破するには小学校高学年において抱括的とり扱い方として学習指導する群像的スケッチの内容に柔軟性を持たせ線の活用の傾向を防ぐ指導法によるのも一案と考えている。

内容のとらえ方に関しては個人作品による運動要因の追跡から、一応その傾向を理解できるが更に資料を充実させ次の機会にしたいと考えている。動きの展開法については一般的傾向を基底にした連続性を探り、舞踊創作を容易にする手段をとりたいと願っている。

昨年度の調査結果、舞踊表現を好む学生は音楽、演劇的表現を得意とし、舞踊表現を嫌う学生は文学的・言語的表現を得意とする傾向も見出しているが各種表現活動を通して自分自身の在り方を発展させ鍛える方向を見出していきたい。

最後に、体育研究室の諸先生方から、舞踊の運動量に関する問題また男子に理解できる舞踊理論の基礎確立の問題が提示されていることを感謝します。